Outram Secondary School 訪問（8 月 24 日）

田園調布学園中等部高等部　副教頭　山本　美穂子

１　はじめに

私立学校教員海外研修団は、2023 年 8 月 24 日、前日に引き続き、視察先である Outram Secondary School を訪問した。視察 2 日目のこの日の目的は、Business and Enterprise の授業を視察することであった。

２　学校（施設）概要

1906 年に Outram Road School という名称の小学校として設立され、その後 1957 年に男女共学の公立中等学校に変更となった。間もなく 120 周年を迎えるシンガポールで最も歴史のある学校の一つである。生徒は中華、マレー系、インド系のシンガポール人、その他外国人など（在籍人数が多い順）から成る。敷地内には公立中等学校で唯一のプールや、クライミング施設がある。

校内のオープンスペースで集合写真

３　教育環境

シンガポール大学近くの落ち着いた環境の中に位置する。校内に学校のモットーが掲げられた立派なオープンスペースがあり、重厚な趣がある。校長先生をはじめ、教員のみなさんの教育活動一つひとつに対する目的意識が高く、非常に熱心な印象を受けた。生徒達は飾らず素直そうで、授業にも懸命に取り組んでいた。

４－１ Outram Secondary School の Business and Enterprise 授業見学

視察日：8 月 24 日　8:45～9:45

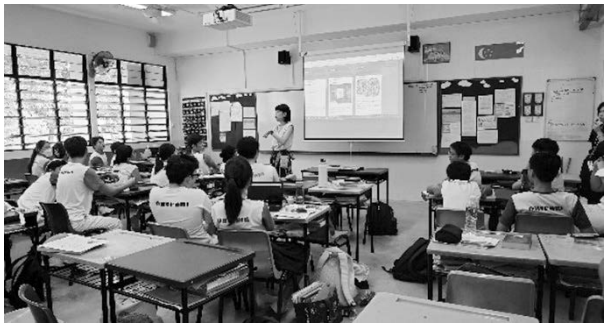
学生：Sec3（15 歳）男女 17 名。　担当教員：セリーン教諭

Outram Secondary School はシンガポールの公立学校内で唯一、Business and Enterprise を教科としてシラバスに組み入れている学校である。見学した授業は、生徒たちは学校内の食堂で実際に自分たちが買い付けた商品を販売する機会である Business Bazaar に向けて、4 人 1 班のグループで、どのような商品を仕入れ、売値をどう設定するべきかを話し合う段階にあった。生徒達は自分のスマートフォン、教育省から 1 人 1 台与えられている PLP (Personal Learning Platform) の両方を持参していた。

授業はまず、マーケティング戦略について前回の授業で身に付けた知識の復習

から始まった。この復習は教育用ゲームのプラットフォームである Kahoot!を用いてゲームで争う形式で行われた。Kahoot!は PLP では制限がかかっており利用できないため、学生たちは自分のスマートフォンを使ってゲームに参加していた。４つの選択肢から正しいものを選ぶ形式、True/False で答える形式の 2 パターンの問題が 11 題出題され、１題ごとに、その時点でスコアの高い生徒が表示されるため、生徒達は楽しみながらも真剣に参加していた。実際に出題された問題の内容は、「マーケティングにおける４つの要素は何か」「シンガポールにおける、ｅコマース市場の取引高はどれだけか」「消費者を守る法律はどれか」「事業を海外に拡張した場合に起こりうることは何か」など、実社会に関連した質問ばかりであった。次にマーケティング戦略が必要な理由をクラス全体で確認した。この日を含めて残り 4 回の授業で、Kahoot!または、PPT（パワーポイント）や Word 文書ソフトのどちらかを使って作成した Business Bazaar を企画するためのビジネス提案書を提出するよう、生徒達に指示が与えられた。

その後、4 人 1 グループに分かれ、Business Bazaar で販売する商品をリサーチし、意見を出し合う段階に移った。1 グループにつき 40 ドルの予算が学校から与えられ、生徒たちはその予算を使って実際に商品を購入する。そして学校の食堂で学内の生徒に対して商品を販売する。利益の 60%はグループに与えられ、40%はクラス全体に与えられる。



授業風景

２つのグループのディスカッションを見学した。１つは女子 4 名のグループ。PLP を使ってｅコマースサイトで販売する商品を探していた。数多くあるｅコマースサイトの中で「Shopee」を使っている理由を尋ねると、「セール商品が多いから。」「かわいくて手ごろな商品の種類が多いから。」と答えてくれた。「Lazada」も人気が高くなっているということであった。もう一つは男子 4 名のグループ。指輪、カバン、ピンバッジ、カピバラのぬいぐるみを売る予定であると言ってそれぞれの商品の画像と仕入れ値、売値を示してくれた。「なぜこの商品を販売することに決めたのか。」と聞くと、明確な回答はなかった。

授業の最後には、それぞれのグループが話し合った内容をプレゼンテーションし、教師が学生たちと対話しながらそれぞれのグループにアドバイスを与えていった。「自分と同じ世代の人が何に惹かれるのかをもっと考えましょう。」「市場調査はしましたか？」「どうやってこの調査の回答率を上げるつもりですか？」など、次の授業でよりよいビジネスプランを練るために各グループが何をすればいいかについて、押し付けるわけではなく、提案するような声掛けがなされていた。商品選定においてやや考えが浅いと思われるグループに対しては教師が、「この商

品を買いたいと思う人たちはいますか？」とクラス内の他の生徒達に問いかけた。誰も挙手しなかったところでクラス全体での笑いがおきた。教師は「さあ、市場調査しましょう。」と声掛けしていた。

Outram には E-Café という軽食を販売するカフェがある。仕入れ先は教員が選定しているが商品の選定は生徒が行っている。授業の集大成としてのイベントだけではなく、日常的に実社会とつながる取り組みがなされていた。

生徒が運営に関わっている E-Cafe

４－２ Outram Secondary School の教員のみなさんとの意見交換

授業を視察した後、Outram の教員のみなさんと意見交換をする機会を設けていただいた。主な話題は 2 点である。

(1)　Business and Enterprise の評価方法について

Outram は 4 学期制（クォーター制）であり、Business and Enterprise の筆記試験は年に 4 回実施されている。学年末の筆記試験が一番比重の高いテストとなっており、それまでに十分な力を発揮できなかった生徒が学年末に向けて努力できるように工夫がなされているそうだ。日本では生徒たちの非認知能力も評価しようという動きがあるが、シンガポールではどうなのかという観点から授業内の生徒のパフォーマンスの評価方法が話題となった。今回視察した Business Bazaar プロジェクトへの取り組みの評価をどのように行っているかを尋ねたところ、プロジェクト自体の評価はしていないということであった。共同作業を通じて、コミュニケーション能力を身に付けること、仲間と協力して一つのプロジェクトを成し遂げることができれば参加態度の目標を達成できたと位置づけており、自分たちが学んだ内容が実社会で実践できるとわかることを理解の到達目標としているということであった。Business and Enterprise という教科は 2 年間にわたって学習する教科であり、生徒たちが自分の学びがどの段階にあるのかを確認することができるようにあらかじめルーブリックを示し、プロジェクト終了毎に反省会を行っているそうだ。

意見交換会

様々な教科においてグループ内での取り組みを成果物で評価することがあるが、貢献していない生徒に対しても同じ評価がつくということから批判される

こともある。だからといってグループ内での貢献度を評価することは主観的な評価になるという問題があり、評価方法を研究中とのことであった。対策として生徒同士のピアアセスメントを取り入れているとのことだった。

(2)　ポートフォリオについての考え方について

Outram では Sec1 年生からポートフォリオの作り方を指導しており、生徒たちは Google サイトに写真や動画、ドキュメントの形式で成果物を保存している。ポートフォリオを構築することの意味は、自分の記録を見て、自分にはどのようなスキルが必要なのかを考え、経験を次の活動に反映することであり、ただ作品を保存するだけではなく構築し、自分の経験を表現できることが重要であるという学校側のスタンスだった。

話題はシンガポールにおける Education Career Guidance の取り組みに発展した。小学校入学時に全国民に Skill future portal というサイトが付与される。興味や関心についての調査結果が蓄積され、その個人データを分析して、個々人の強みを提示したり、興味に応じてどのようなキャリアの選択肢があるのか、どの能力を強化するべきかが示されたりする。そしてその個人の興味にあった教育機関の情報リンクがこのポータルサイトに貼り付けられるそうだ。この Education Career Guidance の取り組みはシンガポールにおいて学生に生きる意義を見つけさせる重要なものと位置づけられている。

４−３　日本人保護者から見たシンガポールの教育の特徴

今回、この Outram Secondary School に通学する日本人生徒の保護者の方を含め、シンガポールの教育事情に詳しい保護者の方々にシンガポールの教育についてお話ししてもらう貴重な機会があった。以下のような特徴が 3 点挙げられた。

意見交換会

(1)　実体験としての教育環境

多民族国家であり、教室にもさまざまな背景をもった友人がいて、彼らと自分との文化の違いが当たり前となっているため、人と比べるのではなく自分に焦点を当て、「自分は何が好きなのか」「自分はどのように社会貢献できるのか」を常に考え、実体験できる教育環境がある。

(2)　ケアの手厚さ

生徒一人ひとりに対するケアが厚く、常に自己肯定感を与える声掛けがなされている。例えばスクールカウンセラーから、「息子さんは今日元気がないように見えたが家庭での様子はどうか？」というような電話が頻繁にあり、家庭でしっかりと子供を見守ることができている。また、教師との面談ではまず生徒に反省点ではなく自分の長所を述べさせ、さらに他の優れた点を教師が生徒に伝えている。

(3)　未来へのフォーカス

シンガポールは発展を遂げても常に危機感を持って変わろうとしているため、次にどうするか、一致団結して意見を出し合う姿勢が国、教育現場にある。未来にフォーカスする教育が行われている。

５　おわりに

私の今回の研修への参加志望動機は大きく２つあった。１つは生徒が主体的な学習者となるために必要なことは何なのかについてヒントを得ること、もう１つは非認知能力の育成方法について考えるための材料を獲得することである。このOutram Secondary Schoolでは、学校での学びは実社会に生きるということを生徒が実体験することをどの教育活動においても大切にしており、そのため生徒の学習意欲が自然と高まっている様子が見られた。また「与えられた環境の中でどう生きていくか」ではなく、日常的に自分を客観視し、望む環境を自ら選んでいくよう導くことにより「主体性が高まり、非認知能力も高められている」のではないかと考えた。以上のことからヒントの回答も得られ、また、教育方法についても様々な知見を得た。

参考：https://www.outramsec.moe.edu.sg/